‘かなこまち’の栽培管理について

2022年３月

農業技術センター
生産技術部野菜作物研究課

１　品種について

（１）品種登録出願

種子親‘紅ほっぺ’と花粉親‘やよいひめ’を交配して、イチゴ有望系統「B×Y#9」を育成し、令和２年(2020年)12月21日に品種登録出願が公表された(出願番号第34922号)。

（２）親株の販売

県と実施許諾契約を締結した全国農業協同組合連合会神奈川県本部から販売される。令和２年から３年間は、神奈川県いちご組合連合会の会員（生産者）を優先して販売される。購入した生産者は、果実販売を目的に苗を増殖することができるが、他への譲渡や販売は種苗法により禁じられている。

２　品種の特徴と栽培管理のポイント

（平成30年～令和元年試験成績及び現地試験聞き取りより）

（１）品種の特徴

・果皮は赤色、果実は果心まで赤色となる。
・果実の縦横比は約 1.4の長円錐形。
・果実硬度は、‘紅ほっぺ’よりやや硬く、‘やよいひめ’より柔らかい。
・３Ｌ～２Ｌ割合が多く、収穫果数の約４割を占める。
・収穫開始期は、‘紅ほっぺ’より１～２週間程度遅く、12月中下旬になる。
・果実糖度は10～12°Brix、酸度は0.9～1.3で糖酸度のバランスよく推移する。
・うどんこ病及び炭疽病に抵抗性はない。

写真１．果実の外観と断面

写真２．着果状況

（２）栽培管理のポイント

・‘紅ほっぺ’より芯止まりは発生しにくいが、窒素切れによる芯止まりを避けるため、定植前の葉柄中の硝酸態イオン濃度は50ppmを目安に管理する。
・育苗後期には窒素が切れるようにし、必ず花芽分化（平年で9月20日頃）を確認し、適期の定植を徹底する。また、老化苗を定植しないように注意する。
・定植後は根張りをよくするため、少量多回数灌水でクラウン周辺部が濡れる程度とし、畝の芯まで水分過多になるような過度の灌水は控える。10月中下旬を目途にマルチングする。
・草勢は強いため、電照栽培は不要と考えられる。
・頂花房の花数は10～12花程度と少なめであり、摘果は必須ではないが、摘果を行うことで第２花房以降の成り疲れを防ぐことができる。早朝の葉縁からの溢液が不足している場合など根張り不足が懸念されるときは、摘果をして根の衰弱を軽減する必要がある。
・第２果房の果実形状が細くなる場合がある。草勢、葉色、下葉の黄化などをみながら、頂果房の摘果、適期の追肥などで対応する。
・先青果が発生する場合があり、急激な肥効や高夜温にならないように注意する。